

序論)

みなさんはこのように崖から落ちそうになっているとき、近くにいる。見るからに自分を引っ張り上げてくれそうなムキムキマッチョな男の人と、崖で落ちそうになっている自分からは姿が見えないけど、「必ず助けてあげるから、手を離してごらん。」という声があったとしたら、どっちを頼るでしょうか？

目に見える力強い男の人のほうが頼りになりそうですよね。このような状況で姿が見えないのに「助けてあげるよ」といっている声を信じてその通りにする人はなかなかいないと思います。

でも、私達が目に見えない神様に頼っていく。神様に助けながら生きていくというのは、ある意味でこの姿が見えない声を信じて従っていく事のようなだと思います。世の中を見渡せば、お金持ちの人とか、高学歴の人とか、技術がある人、権力がある人など自分たちを助けてくれそうな存在はいっぱいいるのに、なぜ、私達は目に見えない神様を信じ、このお方に頼って生きていくのでしょうか。

今日はこの世の力に頼るといことがどうゆうことなのか。【主】に頼って生きていくということがどうゆうことなのかを、みことばから教えられていきたいと思ひます。

御言葉の背景)

今日のみことばは、前回読んだイザヤ書 28 章の前半の続きです。28 章の前半には神様のみことばを軽んじたイスラエルの姿が書かれていました。彼らは自分たちの繁栄を誇り、お酒に酔い、神様のことばをまるで赤ちゃんことばのように、意味のないもの、聞くに値しないものとして扱っていました。【主】は彼らに「ここに憩いがある。疲れた者を憩わせよ。ここに休息がある」と言われたのに聞こうとしなかったのです (28:12)。

そこで神様は、そんなイスラエルと同じように【主】を^{あざけ}嘲る者になってしまったユダの指導者たちに対して、今日の箇所では警告のことばを伝えられています。なぜなら、ユダの指導者たち、つまり、エルサレムで民を治める者たちも、神様のことばを嘲り、神様により頼んでアッシリアの脅威から救われようとするのではなく、南の大国であるエジプトに頼ってこの困難を乗り越えようとしていたからです。

世に頼ることは死の契約を結ぶこと)

しかし、神様はユダの指導者たちがエジプトと結ぼうとしている軍事同盟の契約

について 15 節のように言われています。14 節から読んでみましょう。

28:14 それゆえ、嘲る者たちよ、【主】のことばを聞け。エルサレムでこの民を治める者たちよ。

28:15 あなたがたがこう言ったからだ。「われわれは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。たとえ、洪水が押し寄せても、それはわれわれには届かない。われわれは、まやかしを避け所とし、偽りに身を隠してきたのだから。」

実際にエルサレムの指導者たちが「われわれは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。」といったわけではないとおもいます。これは【主】の目からみると、【主】に頼るのではなく、エジプトと契約を結び同盟しようとしている彼らの行動は、死ぬための契約、よみ・・・つまり地獄と同盟を結ぶようなものだったのです。彼らは「たとえ、洪水が押し寄せても、それはわれわれには届かない。」といていましたが、その根拠となるエジプトの力や、占いや偽預言者たちの言葉はまやかしや偽りであり、【主】からみるとイスラエルを助けるだけの力のないものでした。言うなればエジプトに頼るということは、紙でつくったロープを体に巻いて、それでこの崖から助かると思いこんでいるようなものだったのです。

みなさん、この世には頼りなりそうなものがいっぱいあります。自分の経験やキャリア、お金の力や人脈、物質的な力やこの世の権力も頼りになるように感じるかもしれません。でも、それらは神様からみると、非常に頼りなく、無力なものなのです。

【主】は言われます。17 節から 19 節

28:17 わたしは公正を測り縄とし、義を重りとする。雹はまやかしの避け所を一掃し、水は隠れ家を押し流す。

28:18 あなたがたの、死との契約は解消され、よみとの同盟は成り立たない。みなぎる天罰が押し寄せると、あなたがたはそれに踏みにじられる。

28:19 それは押し寄せるたびに、あなたがたを捕らえる。しかも朝ごとに押し寄せる。昼にも夜にも。この知らせを悟るなら、ただ恐怖あるのみ。

17 節の「わたしは公正を測り縄とし、義を重りとする。」というのは、神様の公正な判断と実際に正しいことをなさる救いの力によって、世の中の力を神様が測られる。ということです。

そして、その神様の審判と御業によって世の力が頼りになるかどうかを調べてみ

ると、それは無力なものとして押し流され、エルサレムの指導者たちが頼りにしていたエジプトという死の契約は無意味なものとして解消され、その同盟は成り立たなくなると言われているのです。

実際、エルサレムにアッシリアが攻め上ってきたとき、エジプトはなんの助けにもなりません。エジプトは、形式上はユダと軍事同盟の契約を結んでいましたが、実際には彼らはユダを利用しようとしていただけで、助けるつもりなどなかったのです。そして、そのようにこの世の力の虚しさに気づいたとき、神様ではない。無力なこの世の力に頼っていた人たちには恐怖しか残らなかったです。だから、【主】はいわれます。20 節。

28:20 まことに、寝床は身を伸ばすには短すぎ、覆いも身をくるむには狭すぎる。」

寝床というのは、私達がゆっくり休むためのベッドですね。覆いというのは私達を包む毛布です。この世の力は、私達がぐっすり休むことができるような本当の安心、私達を優しく包みこむようなぬくもりを与えるためには、短すぎるし、狭すぎるのです。この世の力には、私達を本当の意味で救い出す力はないのです。

要石を据えられる【主】

だから、私達はこの世の力ではなくって、私達が寄りかかってもいいように神様が据えてくださった礎、要の石により頼むしかないので。16 節を一緒に読んでみましょう。

28:16 それゆえ、【神】である主はこう言われる。「見よ、わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊い要石。これに信頼する者は慌てふためくことがない。

この世の力は無力で頼りにならない。だから【主】ご自身が神の民がよりかかることができる礎の石、尊い要石を用意してくださるのです。しかも、この要石は「試みを経た石」だと言われています。「試みを経た石」とは、どんなに叩いても、どんなに重いものを上に乗せても何をやっても割れない石であることを試され、確認された石のことです。つまり、神様は絶対こわれることのない安全な石を用意してくださったのです。

そして、その礎の石、要の石こそ、私達の【主】イエスキリストなのです。ペテロはこのイザヤの預言を引用しつつこのように言っています。

ペテロの手紙 第一 2章4節から8節

2:4 主のもとに来なさい。主は、人には捨てられたが神には選ばれた、尊い生ける石です。

2:5 あなたがた自身も生ける石として霊の家に築き上げられ、神に喜ばれる霊のいけにえをイエス・キリストを通して献げる、聖なる祭司となります。

2:6 聖書にこう書いてあるからです。「見よ、わたしはシオンに、選ばれた石、尊い要石を据える。この方に信頼する者は決して失望させられることがない。」

2:7 したがってこの石は、信じているあなたがたには尊いものですが、信じていない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった」のであり、

2:8 それは「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らがつまづくのは、みことばに従わないからであり、また、そうなるように定められていたのです。

このペテロのことばは、先程よんだイザヤ書の預言だけでなく、イザヤ書8章のみことば、詩篇118篇のみことばも組み合わせて語られています。

イエス様は、確かに私達のために与えられた礎の石であり、尊い要石なるお方ですが、すべての人にとってそのように見えたわけではありませんでした。ご存知の通りユダヤ教の律法学者や多くのパリサイ人、サドカイ人、祭司長たちにとっては、イエス様は、ただのナザレの大工の息子であり、不思議なことをして世の中を騒がし、自分たちの立場を危うくする厄介者でしかありませんでした。

このように神様の救いの御業というのは、誰にでもそれが救いだとわかるようなものではありません。ペテロがいうように信じない者にとってはつまづきの石となり、妨げの岩となるのです。

イザヤが活動していた当時のユダの人たちにしてみても、大国エジプトに頼るといことは、筋肉ムキムキのマッチョな男の人に頼ると同じように、頼もしさを感じたでしょうけども。姿の見えない**神様の言葉**を信じて、頼るといことは、どのように神様が助けてくださるのか想像がつかない曖昧で、確証のないものを感じたのでしょう。

でもみなさん、このように神様の姿が見えないけれども、【主】のことばを信じて頼ることこそが、私達が本当の平安を持ち救われる道なのです。なぜなら、【主】のことばに頼るといことは、このような状態だからです。わかりますか？ 信じて手をはなせば要石の上に立って救いを得られるのです。

だから、イザヤもペテロもいっています。神様が用意された要石なる【主】。「こ

れに信頼する者は慌てふためくことがなく」「この方に信頼する者は決して失望させられることがない」と。。。

みなさん、これこそが【主】からの救いを受けるための方法なのです。自分ではどうやって神様が救ってくださるのか、わからない。でも、神様のみことばのゆえに、分からなくても信じていく。その信仰こそが救いを受ける方法なのです。

イエス様を信じようとしない多くの人は、このような信仰の持ち方をしません。自分で理解して、納得して、わからないと信じない。目で確認しないと信じない。そうゆうふうになっているから、救いの上に立つことができないのです。

でも、神様の救いをうけて本当の救いを手にいれるためには、自分にはわからなくても、みことばの約束のゆえに信じる。というこの信仰が必要なのです。

みなさん、神様が皆さんを救ってくださるということ、それは魂の救いだけではなく、病気からの救いであったり、経済的な救いであったり、嵐からの救いであったりします。その救いを与えるために神様が具体的にどのような事をしてくださるか、私達に分からなかったとしても、それでも【主】を信じる信仰を持ちましょう。

それこそが、私達が神様の救いを受け取る方法なのです。

神様は不思議な御業をされる)

だからこそ、21 節以降では神様が不思議で、意外な働きをされることが書かれています。21 節を読んでみましょう。

28:21 実に、【主】は起き上がられる。ペラツィムの山での時のように。主は奮い立たれる。ギブオンの谷での時のように。みわざを行われるが、そのみわざは不可思議。働きをされるが、その働きは意外。

ここでいう「ペラツィムの山での時」とか「ギブオンの谷での時」というのは、サムエル記や歴代誌に書かれているダビデがペリシテ人との戦いの時、洪水のような神様の助けの御業を受けた時のことと、ヨシュア記にかかっているヨシュアがアモリ人の5人の王と戦うとき、【主】の力を受けて激しい戦いを制してイスラエルが5人の王たちに勝利した時のことを指しています。

人間的に考えるならばどちらも勝てるとは思えない戦いでした。でも、彼らが【主】のみことばに従ったとき、【主】から激しい力をうけて勝利することができたのです。

それは人間的な視点で考えるのならば、とつても不思議で意外なことです。でも、その意外なことをされるのが【主】の救いなのです。

また、23-29 節では、農夫の種まきと脱穀の例をあげて、神様の救いの御業が単純ではないことを説明しています。まずは 24-26 節を読んでみましょう。

28:24 農夫は種を蒔くために、いつも耕してばかりいるだろうか。土地を起こし、ならしてばかりいるだろうか。

28:25 その地面をならしたら、ういきょうを蒔き、クミンの種を蒔き、小麦を畝に、大麦を定まった場所に、裸麦をその境に植えるではないか。

28:26 農夫は厳しく指導され、彼の神は彼に教える。

時間がないので細かい説明しませんが、一概に農夫が種をまくといっても、その蒔くものが「ういきょう」なのか、クミンなのか、小麦なのか、大麦なのか、裸麦なのかによって、種をまく場所も、蒔く方法もちがいます。農夫たちは神様からそれぞれに適したやり方を教えられたと想像していても、実際には神様が、自然を通して、農夫達にそのやり方を教えていたのです。

また、それは作物の脱穀についても同じです。読みませんが、27 節、28 節には種まきと同じように、脱穀も、ういきょうやクミンと麦では違うということが書かれています。脱穀もそれぞれに相応しいやり方があって、その相応しいやり方をしないと上手に脱穀することができません。それと同じように神様は私達を救うために、それぞれに相応しい救いの仕方をされるのです。

もちろん、私達の魂の救い、イエスキリストによる救いというのは共通していますが、例えば病気からの救いとか、経済的な救いとか、そういうものは神様の不思議なご計画の中で、それぞれに相応しいやり方でなされるのです。

人によっては奇跡的なやり方で病気が癒やされる人もいるでしょう。例えば、私が昔持っていた癩癩という病気が、祈りによって癒やされたというのは奇跡的な癒やしに該当するでしょう。でも、ある人は病院で処方された薬や、手術によって病気が癒やされることもあります。神様は私達には思いもつかない方法でそれぞれにふさわしく助けの手を差し伸べてくださるのです。

だから、神様がどのように救いの御業をなさるか、私達が計算したり、理性的に考えたりして理解することはできないのです。神様は、神様にしか知り得ないご計画によって、私達の思いを超えた救いの御業をなさいます。これを聖書は「摂理」といっています。だから、29 節にはこのように書かれています。

28:29 これも万軍の【主】のもとから出ること。その摂理は奇しく、その英知は偉

大である。

奇しく。というのは不思議だということですね。

神様は、不思議な救いのみわざをなさいます。だから、私達は神様のことをあざけてはいけません。

結論)

みなさん、神様は私達の思いを超えた不思議な救いの御業をなさるお方です。だから、自分勝手に判断して、この世の力に頼るのではなく、私達に本当の平安を与え、安心を与え、希望をあたえてくださる【主】を、単純に信じましょう。

神様が、救いを与えてくださり、頼るべき要石を与えてくださると、聖書で約束されるのならば、それはその通りになるのです。

考えて納得して信じるのではなくって、みことばをそのまま素直に信じる。そのような信仰を持ちましょう。

それこそが、【主】の救いを受け取る方法であり、【主】の偉大な救いの御業を体験する方法なのです。16節をもう一度読みましょう。

28:16 それゆえ、【神】である主はこう言われる。「見よ、わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊い要石。これに信頼する者は慌てふためくことがない。

【主】はこのみことばの通り、世界中の罪人がこのお方に寄りかかっても頼れない礎の石であり、要の石であるイエス・キリストをこの世に送り出してくださいました。キリストこそ、私達の救いです。テモテへの手紙にはこうあります。

テモテへの手紙 第一

1:15 「キリスト・イエスは罪人を救うために世に来られた」ということばは真実であり、そのまま受け入れるに値するものです。

是非、このことばのとおり、【主】の救いのみことばを、そのまま受け入れて信じ、魂の救いと日々の救いを受け取って、信仰によって神様の不思議なみわざを体験する者となっていきましょう。